1970107

# 学位論文審査の要旨

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 学位申請者 | 中村　まい<br>比較社会文化学専攻2019年度生 | | 論文題目 | 阿波踊りの企業連に見る多層的関係を構築・強化する機能<br>―担い手としての企業の可能性― |
| 審査委員 | 主　　査: | 水村　真由美　教授 | インターネット公表 | 学位論文の全文公表の可否　:　　否 |
| | 副　　査: | 棚橋　訓　　教授 | | 「否」の場合の理由 |
| | 副　　査: | 福本　まあや　助教 | | □ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む |
| | 審査委員: | 神田　由築　　教授 | | □ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある |
| | 審査委員: | 波照間　永子　教授<br>(明治大学) | | ■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている |
| 学位名称 | 博　士　　(学術) | | | ■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている |
| (英語名) | (Ph. D. in Dance Studies and Sociology) | | | □ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている |
| | | | | ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について |

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文の目的は、民俗芸能である阿波踊りを対象に、それに参画する企業連を媒介として構築・強化される諸関係(踊り集団に属することで生じる企業と参加者の関係、踊り集団の参加者間で構築される関係、企業と地域社会や一般大衆との信頼関係、踊り集団間での協力関係など)に着目することで、現代都市部で果たし得る民俗芸能の社会的機能を明らかにすることであった。論文は4章で構成され、第1章では、阿波踊りの芸態の変容と企業の関わりについて阿波踊りの歴史を文献及び資料より検討した。第2章では現在の民俗芸能としての阿波踊りの舞踊特性および観光資源としての祭りである阿波おどりの運営、参加する担い手の実態について概観した。第3章では、芸態が類似する三原やっさ踊りと全国展開のあるよさこい鳴子踊りの企業チームを比較対象として、質問調査を通して阿波踊りの企業連の活動実態を明らかにした。第4章では、阿波踊りの企業連の運営に関して、聴き取り調査で得た情報から具体的な参与事例を通して企業連により構築・強化される関係性を検討した。その結果、歴史的には大正期に企業連が誕生して以降、阿波踊りの芸態の変容は技巧的な「見せる」踊りの需要が高まり、隊形を組み合わせる演舞構成が企業連の演技の応用を広げると同時に、習熟度の異なる集団を包含する芸態となっていると考えられた。

以上から、阿波踊りの企業連は、従業員の福利厚生、社内の従業員同士の連携強化、社員教育、企業PR、顧客の接待、関連企業・取引先企業との関係強化の機会として活用され、個人、組織、社会という3つの異なる次元での多層的な関係の構築・強化が可能になると考えられた。また企業連は「広義の社縁」が祭りという境界状況でのコミュニタスの力により強化され企業連における多層的な関係になると考えられた。阿波踊りの企業連は、「見られる」場の形成が担い手の活動実態に影響すると考えられた。また他の民俗芸能との比較から、阿波踊りの企業連は、地域及び企業外の参加者、有名連・一般連との協力が特徴であった。聴き取り調査から得た5つの活動類型の事例からは、隊列という阿波踊り特有の舞踊特性を利用し、有名連や一般連などの習熟した踊りとの協働が「見世物」としての質を担保している現状が示された。

第一回審査会では、民俗芸能としての阿波踊りと祭りとしての阿波おどりを明確に区別して論じること、現代の阿波踊りに至る歴史的背景や、阿波踊りの芸能実態について資料を加えて論じる必要があるといった点が指摘された。企業連を媒介に構築・強化される関係性を論じる上で、先行研究から引用した社縁に加えて、文化人類学的考察としてコミュニタスの概念から論じることが提案された。第二回審査会においては、第一回の指摘が的確に修正され、研究題目も論文の修正を反映して改訂された。公開発表会においては、明確な論証として研究全体のまとまりが確認された。本論文により、民俗芸能の社会的機能のうち、多層的な関係構築・強化の機能が阿波踊りの企業連に見られることが明らかになった点は、本論文の独自性として高く評価された。また企業連が現代の阿波踊りを支えつつ、民俗芸能が関わる今日的な課題を解決する糸口の一つとなり得るといった考察は、今後の日本の民俗芸能研究に新たな研究視点を投じる新規性とも評価できた。公開発表会においては、参加者からの質問に的確かつわかりやすい言葉で答えると共に、自らの研究に対する意見や今後の展望についても、明確に述べる姿勢が確認された。本審査委員会は、本論文を博士論文としての水準に充分達していると判断し、博士(学術)、Ph.D. in Dance Studies and Sociologyに相当するものと認めた。